

イザヤ9章1-7節 「神の現われを待ち望む」

アウトライン

1A 神の顕現

1B モーセ — 情け深い神

2B エリヤ — 小さな声

3B ヨブ — 苦しみの中の答え

4B ピリポ — 満足

2A 現われによる実

1B 栄光と礼拝

2B うめきの満たし

3B 正義の遂行

4B 神の恵み

本文

私たちは間もなく、クリスマスの時期に入ります。クリスマスは、私たちクリスチャンが信じているイエス・キリストがお生まれになったことを思い、神を礼拝する時ではありますが、実はカトリック等の歴史的な教会では、伝統としてキリストの降誕の前に、この方の現れを待つ待降節という期間を祝っています。ラテン語で「アドベント」とも言います。「アドベント」とは、「現われ」また「到来」という意味で、王などの主権者や力を持つ者がやって来ることを元々意味します。それから、神が現れることとして使われていました。そこから、キリストの到来を表すようになります。

アドベントはクリスマスから四週間前の日曜日から始めるそうです。一年を、キリストが行なわれたことを一巡して思い巡らしお祝いするのですが、私たちプロテスタントの教会は基本的にその行事は従っていません。基本的にはクリスマスとイースター(復活祭)だけを守っています。

けれども、キリストのことをある特定の時期に思い巡らすことは、とても良いことです。日本では十二月は「師走」と呼ばれています。お坊さんが走り回る忙しさが由来だと言われています。仏教徒でなくとも、会社や忘年会などで正月が来るまで本当に忙しくなる月ですね。実は、初めてのクリスマスであるキリストのご誕生そのものが、ごったがえしたベツレヘムの町において、とてもこじんまりした形で祝われました。忙しくしているからこそ、その中において立ち止まってイエス・キリストを思うことは意味あることです。クリスマスは来週、お祝いしましょう。

アドベントも同じように、今の時代を生きている私たちと無関係ではありません。いや、今でこそ思い巡らさなければいけないことです。今日は日本では総選挙です。政治について、また日本と

いう国について、私たち日本人はだれでも良くなっていると思っていないでしょう。外に出てお仕事をしている何人かの方は、このことはひしひしと感じておられるに違いありません。いったいこの先どうなるのか分からず、どの政治家が、また政党がこの日本の舵取りをするのかについて考えると、ほとんど希望が持てないというのが正直な思いでしょう。そのような時にこそ、救い主としての光が現れるというのがアドベントの意味です。

先ほどの交読文で読んだイザヤ書9章1-7節を開いてください。そこは暗い世の中が背景となっている箇所です。私は海外に行く機会が多いのですが、このような混沌とした日本であっても、他の国に比べるとはるかに豊かで、安定しており、恵まれていると感じています。世界にある九割の国々では、私たち日本人が空気のように慣れ親しんでいる自由や生活の基本的な人権が保障されていません。

けれども、そうした国々であっても、当時の中東地域に住んでいた状態より、まだ良いと言えるかもしれません。9章1節をご覧ください。「しかし、苦しみのあつた所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。」「**苦しみ**」とあります。この背景は、北イスラエルの国がアッシリアという大国によって攻められて、その住民がアッシリアに捕え移されていくというのが背景となっています。アッシリアが行なったことは、あまりにもおぞましいことで、残虐きわまりない方法で人々を征服し、恐怖を植えつけることによって反抗できないようにした国でありました。その手法は、今のテロリストも青ざめるほどの残虐さです。

そして、北イスラエルにはイスラエル人ではない異邦人が移住されてきました。わずかに残されたイスラエルの民とその異邦人が雑婚して、また宗教もユダヤ人の信仰と異教が混ざっていくようになりました。これが背景にあり、ガリラヤ地方も北イスラエルの中にあります。それで「**異邦人のガリラヤ**」と呼ばれています。アッシリアの捕囚の後にはバビロンが攻めてきました。そしてバビロンの後にペルシヤの時代、それからギリシヤの時代が来ました。数多くの戦争と抑圧が繰り返されました。それからローマです。ローマの圧制はこれまで以上に抑圧的で、ユダヤの民はもたえ苦しみ、あえいでいました。

その中で彼らは光を見るのです。イザヤ9章2-5節をもう一度読んでみましょう。「**やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。あなたはその国民をふやし、その喜びをまし加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。戦場ではいたすすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。**」このように、光となってくださるキリスト、救い主がイスラエルの民に救いと解放を与えてくださいます。それで、イエスがおおよそ三十歳になってガリラヤ地方に現れた時に、数多くの方がこの方についていったのです。この方に、もしかし

たら希望の光があるかもしれないと思ったのです。

そして、キリストの現われが6-7節にあります。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」キリストがどのように現れるのか、それが6節に書いてあります。赤子としてお生まれになります。けれどもこの方は単なる人間ではありません。神の子であられます。そして、人間には到底思いつかない方法で物事を解決する、不思議な助言者です。そして、はっきりとこの方が力ある神ご自身であると宣言されています。そして、永遠の神と等しい方であります。だから、キリストは神の御子であられ、ご自身も神なのです。

そしてこの方は平和の君です。ですからこの方が到来すれば、正しいさばきによって世界に平和が満ちあふれるのです。これが神の現われであり、アドベントであり、イスラエルの民が待ち焦がれていた方であります。

1A 神の顕現

私たち人間には、いつも呻きがあります。「本当はこうあるべきなのに、現実はそうになっていない。」という呻きがあります。そして、なぜ理想のようになっていないのか思いあぐねます。その時に、言葉による、自分たちの理解による答えを探そうとします。その解答を求めて、ある時は原因探しをします。けれども原因探しをしているうちに、迷宮入りをしていきます。解決になっていません。ある時は改革をしようとしてします。けれども、改革どころかさなる混乱をもたらすこともあります。私たちに必要なのは、自分を理解させるための知識ではありません。そうではなく、実在でありましょう。

苦しみに対して必要なのは、その苦しみと共にいることです。津波の被災地において、「このような悲惨な出来事において、神はどこにいるのか？」という問いに対して、明確な答えを与えることができます。「神を信じる者たちがそこにいることによって、神がその人たちと共におられる。」ということです。言葉による説明ではなく、そこに共にいるということでその問いに対する解答を与えることができます。先日、宮城県で小さな津波が起きましたが、今回は一年前に被災地に引っ越した宣教師夫婦が地元の人と共に高台に避難しました。そして、こう書いておられます。「私たちにとっては今回の地震はこここの市民になってから初めての大きな地震でしたが、このことを通して、私たちがこの地域に引っ越して来た理由の再確認の時ともなりました。この土地で生活を共にすることで色々なことを共感し合い、その中で主の証人ために引っ越してきたのだと主に教えられました。」

先ほど読んだイザヤ書の預言の少し前には、キリストが「インマヌエル」と呼ばれることが預言さ

れています。インマヌエルとは、「神がともにおられる」という意味です。その存在を現すこと自体が、あらゆるうめきや苦しみに対する完全な解答となることがあるのです。

1B モーセ — 情け深い神

聖書には、数多くの神の現れの場面が出てきます。イスラエルの民がとてつもない罪を犯した後のことでした。モーセがシナイ山に上って、神から教えを受けていた間に、彼らはふもとで金の子牛を造り、乱れたパーティーを行なっていました。このことで、悔い改めなかった者たちの多くが死に、その傷はすぐには癒えませんでした。けれども、主がモーセの祈りを一つ一つ聞かれます。「あなたの願ったこのことも行おう。」と仰ってくださいました。けれども、次の祈りについては、完全には聞き入れられませんでした。モーセはこう願ったのです。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。(出エジプト 33:18)」

主は、「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。(19 節)」と言われました。けれども、主ご自身の顔を見れば、人は生きていくことができません。そこで主はモーセを岩の裂け目に入れ、その間にモーセのところを通り過ぎ、その後ろ姿だけ見せるようにされました。そして主が彼のところを通り過ぎました。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。(34:6-7)」金の子牛を拝み、乱れているところで罰せられたイスラエルに対して、憐れみ深く、情け深い方として、また怒るにおそく、恵みとまことに富んだ方として現れてくださったのです。

今、この中で、とてつもない罪また過ちを犯したという思いで苛まされている方は、どうか情け深い神、怒るにおそい方、恵みとまことに富んだ方に触れてください。

2B エリヤ — 小さな声

そして旧約時代に出てくる他の偉大な預言者に、エリヤがいます。彼は、イスラエルがバアルという偶像を拝んでいる時に神に遣わされた人です。バアルの預言者四百五十人と、祭壇の上のいけにえに火が下るかどうかの争いを行ないました。彼らがバアルの名をいくら呼んでも何の答えもありませんでしたが、エリヤが、イスラエルの神の名で願い求めたら、天から火が下って、完全にいけにえを食い尽くしました。そこでエリヤは、バアルの預言者を処刑しました。

けれども、バアル信仰を導入した、アハブ王の妻イゼベルがエリヤを殺すと言いました。それで彼は恐れをなして、はるか遠くのシナイ山にまで逃げたのです。そして自分は死にたいという絶望感に捕えられました。けれども主が現れてくださいました。その方法が興味深いです。「主は仰せられた。「外に出て、山の上で主の前に立て。」すると、そのとき、主が通り過ぎられ、主の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも主はおられなかった。地震のあとに火があったが、火の中にも主はおら

れなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。(1列王 19:11-12)」

私たちにとって、激しい風、地震、火などがあれば、それは神の大きな現れだという気持ちを持ちます。天変地異的なことがあれば、神を思うわけです。けれどもエリヤにとっては、これは日常茶飯事だったのです。彼が祈れば、イスラエルに三年間雨が降りませんでした。そしてまた祈れば雨が降ってきました。また天から火が降りました。けれども、ここではエリヤは、それらのものに主がおられなかったことを経験します。これらのものの後に、「かすかな細い声」があったのです。エリヤには、目覚ましい、驚くべき出来事ではなく、かすかな細い声におられる神が必要でした。

ですから、アドベントは忙しく、自分の周りでめまぐるしく物事が動いていく人々にも用意されています。かすかな細い声で語りかけてくださる神が現れてくださるのです。

3B ヨブ — 苦しみの中の答え

そして旧約における偉大な人物として、ヨブがいます。彼ほど不条理に満ちた経験をした人はいないでしょう。彼は正しい人でした。神を恐れる人でした。家畜に恵まれ、また子供にも恵まれました。ところが数日のうちに、これらの全てのものが奪い取られました。そして自分の健康さえも犯されて、悪性の腫物が全身にできたのです。

この出来事に対して、本人も、ヨブの友人たちもなぜなのか分からず、思いあぐねていました。そして、その原因を探すためにヨブに隠れた罪があるに違いない、と友人たちは言い始めました。ヨブは、そんな身に覚えがないと反論しました。そして神がなぜこのようなことをなされるのか、という訴えに変わっていききました。自分自身でなければ、神ご自身が原因ではないのか？と彼は思ったのです。

けれども、嵐が起こりました。そして嵐の中に主が現れたのです。そして主はヨブに対して、一つ一つ問いただされました。この地上の基はあなたが造ったのか、それはどのように造られたのかあなたは知っているのか？また海の深みについては、あなたは知っているのか？天についてはどうなのか？雨や雪が降ることすべてをわたしが行なっているのだ。星座もしかり、そして地上では動物に食糧を与えているのはこのわたしだ。そして巨大な動物、恐竜でさえもわたしはそれを治めている…。

神はついに、ヨブがなぜ苦しんでいるのかについての答えを与えませんでした。けれどもヨブは、完全に満足したのです。こう言っています。「知識もなく、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。どうか聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示してください。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。(42:3-6)」神について語っていたけれども、今、神をこの目で見た、と

言っています。これが、苦しみに対する原因を知り得なくても、完全な答えとなっていたのです。

今、苦しんでいる人、自分の周りで何が起きているのか分からない人に対しても、アドベントが必要です。神はご自身の偉大さと力をもって現れてくださいます。

4B ピリポ — 満足

そして新約に入って、このような神の現われについての知識を知っていたユダヤ人の弟子たちがいます。その中の一人ピリポが、イエスに尋ねたのです。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。(ヨハネ 14:8)」父なる神を見せてくださったら、私たちは満足します、と言っています。その質問に対してイエスはこう答えられたのです。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。(9 節)」イエスこそが父なる神の現れであり、目で見えない形ではなく、私たちと同じ人の姿によって完全に現れてくださったのです。

2A 現われによる実

そして、神が私たちに現れてくださることによって、私たちにどんな変化が与えられるかを見ていきたいと思えます。

1B 栄光と礼拝

旧約時代においては、神は幕屋また神殿にご自身の栄光を現されました。二つの興味深い出来事があります。主がモーセに幕屋を造れと命じられて、それを完成した後ですが、「そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。(出エジプト 40:34-35)」栄光が幕屋の中に満ちたので、モーセは入ることができなくなりました。そして約五百年後、同じように神殿をソロモンが建てた後に次の出来事が起こりました。「祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が主の宮に満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。(1列王 8:10-11)」ここでも同じように、神の栄光の雲が宮に満ちたので祭司たちが中に入ることができませんでした。

神が現れると、神がその栄光の姿をもって現れると、私たち人間の入る場がなくなります。私たちがああだ、こうだと言っていること、自分たちでこうやってこうと考えていることがなくなります。主が行なわれて、主が語られて、主がすべてのものを満たしてくださるからです。

思い出すが、私は何度もこの御言葉を引用しているのですが、生まれつきの盲人についての話です。周りの人は、生まれつき盲目であることについて、いろいろなことを話していました。けれどもイエスはこう言われたのです。「神のわざがこの人に現われるためです。(ヨハネ 9:3)」だれの

せいなのか、という分析ではなく、神ご自身の栄光がその人に現われるのです。そしてその最後に、目の開いた本人は、イエス・キリストの前にひれ伏して、この方を神の子キリストとしてあがめました。

2B うめきの満たし

そして神が現れると、私たちの呻きが満たされます。「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。(ローマ 8:22-23)」これは、キリストが再び現れてくださる時、再臨の時のことを話しています。アダムが罪を犯して、この地が呪われたものとなりました。今、この地上に災害があることは、その時から始まりました。また弱肉強食の動物界も実は、もともとはそのようなものではありませんでした。そしてもちろん、人間による環境破壊があります。ですから被造物全体が呻いています。

そして私たち自身も呻いている、とあります。それは「御霊の初穂をいただいている」とあります。イエス・キリストを自分の救い主として信じて、受け入れた人には、神の霊が心に与えられます。心が一新されます。赤ん坊として生まれた時から人には罪があり、その罪のせいで私たちの霊は神から離れていて死んでいました。けれども、キリストの十字架を信じることによって、その罪を代わりにキリストが負ってくださったことを知って、それによって罪が取り除かれます。それで、新しく霊が生まれたのです。けれども私たちの体は変わっていません。この身体は、アダムの時から変わっておらず、その罪の性質も受け継がれています。ですから、私たちの霊は贖われたのですが、体がまだ贖われていません。

それで、キリスト者の心はいつも呻いています。自分の願っている善を行なうことができず、かえって悪を行なっているという葛藤を覚えます。けれども、キリストが戻って来られた時に私たちの体も変えられます。栄光の姿に復活します。それでその体に罪がなくなり、私たちは霊肉ともに神の御心と完全の調和するのです。それが、キリストの現われの時に完成するのです。

3B 正義の遂行

そしてキリストの現われの時に、神の正義が実行されます。先ほど読んだイザヤ書の箇所にはこうありました。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。」私たちの心は、正義に飢え渴いています。この世界にある、また自分の周りにある不条理に対して、それがなぜ清算されないまま、つまり裁かれないままにされているのか？という強い思いがあります。ちょうど、何年も使っているウィンドウズがその動きが鈍くなってしまっているように、人の営みが積み重なってくると、どうしようもない閉塞感の中に捕えられていくようになっています。

けれどもちょうど、ウィンドウズを再インストールすればそのデータの全てが更新されるように、この世界もリフレッシュされる時がきます。その時に、これまで各人が行なってきたことに対して、神が公平に、真実に裁いてくださるのです。黙示録には、地上に対する裁きが天から下る時に、天において、「あなたのさばきは、真実で、正しいさばきです。(黙示 18:7 等)」という声が上がります。主のみが公平に裁くことができになるのであり、キリストが現れた時に私たちの正義に対する呻きは完全に満たされるのです。

4B 神の恵み

そして最後に、キリストが現れる時に私たちは恵みに満たされます。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ 1:14)」恵みとは、私たちが受けるに値しないものを一方的に受けることです。これは不公平です。罪を犯し、罰せられなければいけない者が、もっとも優れた祝福を受けるようにされることなのですから。けれども、神はそれを成し遂げてくださいました。

キリストの初めの現われは、幼い子がベツレヘムで生まれることによって起こりました。救いはこの世に来ました。私たちは正義を願っていますが、自分自身が正義を行っていないという矛盾があります。そしてその行っていない自分に対して、神は怒りをもって臨まれるのではなく、むしろへりくだりと、優しさをもって臨まれます。その神の謙虚さに触れる時に、私たちの心も砕かれて、柔らかくなり、そして真実に正しいことを行なうことができるのです。

いかがでしょうか？ 皆さんは、キリストに現われに見えることができたでしょうか？ 心からの呻きを持っておられるでしょうか？ それはこの方のありのままの姿に触れる時に満たされます。